
豆まき

川島徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆まき

【Nコード】

N4796B

【作者名】

川島徹也

【あらすじ】

今日は節分だ。俺は豆まきをしながら毎年思い出すことがある。

（前書き）

思い付きで書いた即興小説です。

今日は節分の日だ。
毎年この時期になると妹の言葉を思い出す。

春になったら俺が大学生になる年のこと。

俺は四歳年下の妹と豆まきの準備をしているとき、妹が独り言のように呟いた。

「鬼は外、福は内って言うでしょ」

「ああ」

「ってことはさ、豆まきする前から鬼がいるってことになるよね」

「そうかもしれないな。わざわざ豆まきするだけの為に鬼を入れたりしないからな」

妹は豆の入った真空パック開けながら続ける。

「その年に鬼を外に出しても、また来年までには鬼は溜まってるって事だよな」

「そうだな」

「それはどうして溜まるんだろうね」

「さあな。きっと俺達が持って帰って来るんだろうな。」

「そうかもしれないね。準備できたよ。お兄ちゃん」

たくさん豆の入った紙コップを手渡される。

升を使うのが一番良いのだが、そんな物は家には無いので代用品として使っている。

まあ、用途もだいたい一緒だし、いいんじゃないとのことだった。

「鬼は外、福は内」

俺は妹より一段高い軌道で豆を投げる。

「鬼は外、福は内」

「なんか、いまいち盛り上がらないね。」

「豆まきってそんなにエキサイトする行事だったっけ」

「そうだ、お兄ちゃん鬼やってよ」

「いたた」

機関銃の如く豆を投げる妹。

「やっぱり標的があったほうが投げやすいね」

「家庭内暴力だぞ」

そう言いながら逃げ回る俺。

「春になったらお兄ちゃん一人暮らしでしょ。鬼なんかに負けないでよ。頑張ってね」

あの時は目から涙が出そうになったなあ。

そして今年は一人寂しく豆まきをしている。

ああ、あの頃に戻りたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4796b/>

豆まき

2010年10月31日04時40分発行